

# 聖一派と明兆筆「五百羅漢図」の史的意義

鄭 美景

## はじめに

至徳三年（一三八六）十月十七日、東福寺住持振岩芝玉（東福寺五三世）は東福寺画僧吉山明兆（一三五二～一四三一）が画いた「五百羅漢図」五十幅<sup>①</sup>（以下、五百羅漢図と称する）の慶讃仏事を行った。当時の南禅寺住持であった聖一派の性海靈見（南禅寺四〇世、一三二五～九六）が「東福羅漢供跋」<sup>②</sup>を書き、初代僧録春屋妙葩（一三二二～八八）からも贈詩<sup>③</sup>が送られた。殊に性海の跋文には、明兆が東福五百羅漢図を画くようになった経緯が紹介されている。寺の行事に使われる公用画に携わっている画工のため、跋文に敬意を表すのは異例なことである<sup>④</sup>。

康暦の政変とは、室町幕府管領細川頼之（一三二九～九二）が失脚した政変であり、その後幕府人事が斯波派に塗り替えられ、春屋が復帰することになる歴史上、または禅宗史上の転換点であるが、いわゆる至徳三年は相国寺の建立に及んで春屋による五山位次が大改制される年であった<sup>⑤</sup>。これによって東福寺も、新たな五山派教団管理機構体制の下で京都五山第四位という確固たる地位を保障されることになった<sup>⑥</sup>。当時の東福寺の情況については別稿に譲ることにし、ここでは概括的にまとめる。東福寺は元応元年（一三一九）第一回の大火により大伽藍が焼失してしまい、また鎌倉幕府の滅亡、後醍醐天皇による建武新政、足利幕府成立といった激動期を迎えた。経済的には以後も相次ぐ火

災による再建の遅延<sup>(8)</sup>に伴なう困難や、存立的には政権の変化による国家寺院、あるいは五山寺院としての位置の不安定さ、夢窓派の隆盛による牽制などの問題を長い歲月抱えていた。

聖一派内部から単発的でなく持続的で組織的な復興運動の兆しが見えはじめたのは、康暦元年（一三七九）十月十七日の当時、東福寺住職性海（東福寺四三世）の主催で行われた開山聖一國師円爾弁丹（一二〇二〜八〇）の百年忌からであった。<sup>(9)</sup>至徳三年の羅漢供も性海が深く関わっており、その延長線上にあったと考えられる。

本稿ではまず東福寺における羅漢信仰を踏まえた上で、東福寺復興運動に拍車をかけることになる聖一國師の百年忌、次に至徳三年の羅漢供と、その羅漢供で使われた明兆筆五百羅漢図のもつ史的意義を探ることにする。

### 一、東福寺における五百羅漢信仰

東福寺の創建は、かつて建寺度僧の志をもっていた九条道家（一一九三〜一二五二）の見た嘉禎二年（一二三二）四月二日夜の瑞夢が契機になった。鉄牛円心編『聖一國師年譜』の「嘉禎二年丙申」条には、その瑞夢の記事に次いで、道家により構想された新寺仏殿内部の諸尊像が記されている。

殿内安<sup>二</sup>釈迦像長五丈<sup>一</sup>。其左右觀音弥勒像、各減<sup>二</sup>其半<sup>一</sup>。四天王像、復減<sup>二</sup>其半<sup>一</sup>。釈迦眉間藏<sup>二</sup>遮那像<sup>一</sup>。其長五寸。光中化仏、五百軀<sup>一</sup>〔其五百數者、蓋表<sup>三</sup>五百塵点成道、五百慈悲大願、且復教<sup>二</sup>化五百羅漢<sup>一</sup>、是乃開近顯遠妙旨也〕。僧亦五十員。如寺產稍豊、則当<sup>レ</sup>増<sup>二</sup>五百員<sup>一</sup>、僧衆則日夜孜孜、当<sup>下</sup>学<sup>二</sup>顯密性相大小權実等教<sup>一</sup>、以祈<sup>二</sup>国家安寧<sup>一</sup>、復祝<sup>中</sup>君臣寿福<sup>上</sup>。寺名<sup>二</sup>東福<sup>一</sup>、即聖<sup>二</sup>洪基於東大<sup>一</sup>、取<sup>二</sup>盛業於興福<sup>一</sup>、丞相所願<sup>レ</sup>如此<sup>(1)</sup>。

のち「新大仏」と親しく呼ばれる本尊釈迦像は高さ十五メートルに達し、眉間には大きさ十五センチほどの毘盧遮那仏を象嵌し、光背には五百軀の化仏を安置した形であった。また、五百という数について「五百塵点に成道、五百の慈悲大願」の意を表すと示す。ここでの「五百塵点に成道」とは、『法華経』「寿命品」でいう釈迦の成道の久遠をたとえる「五百塵点劫」を指す。つまり、釈迦の成道の久遠に悟りを開き仏となり、慈悲を施し大願を成就させ、五百羅漢を教化するという『法華経』「寿命品」の「開近顕遠」の旨を、仏殿に具現しようとしたことが分かる。さらに寺産が豊かになるにつれ、僧員数を五十から五百に増やしたいと言う道家の念願は、五百という数を道家が特に念頭においていたと考えられるところである。

また、東福寺法堂の中に約五〇センチの大きさの羅漢像五百軀があった記録が建長二年（一二五〇）の「沙弥行惠〔藤原道家〕家領処分状案」の東福寺項から窺える。

法堂一字〔五間四面、二階、講堂是也／瓦葺〕

上層奉安置八尺文殊師利像一軀

等身十六羅漢像一軀

一尺六寸大阿羅漢像五百軀<sup>13)</sup>

すなわち、法堂における諸尊像群は、文殊菩薩を本尊として等身大の十六羅漢像と五百羅漢像から成っていた。これらの諸尊像群は『文殊般涅槃経』をもとにした構成と見られ、当時の南都で広がった叡尊や忍性らの文殊信仰によるものであると推量できる。<sup>14)</sup>

以上の道家による『法華経』や『文殊般涅槃経』と拘わりのある五百羅漢信仰のほか、聖一国師側の羅漢信仰の面

影も東福寺に遺っている。まず、東福寺において羅漢供の行事は聖一國師によって制定されたものである。聖一國師は弘安三年（一二八〇）十月十七日示寂する一ヶ月前、東福寺の月次行事として守るべき十二項目を「公家関東大檀那御祈祷等注進文」に定めた。

一、毎月朔望両度皇辰、就<sub>二</sub>大仏殿<sub>一</sub>誦<sub>三</sub>誦大悲呪、消災神呪<sub>一</sub>回向、所集殊勲、祝<sub>二</sub>延今上皇帝聖寿無疆<sub>一</sub>云々次就<sub>二</sub>法堂<sub>一</sub>焼香

一、毎月「初八、十八、廿八」就<sub>二</sub>僧堂前<sub>一</sub>念<sub>三</sub>誦十方諸仏菩薩宝号<sub>一</sub>回向同前

一、毎月晦望両度布薩、奉<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>公家関東大檀那御家門<sub>一</sub>

一、毎月初一日、就<sub>二</sub>山門閣上<sub>一</sub>羅漢供、回向曰、天下太平海内静謐<sub>15</sub>

第一に今上皇帝の聖寿無疆、第二に十方諸仏菩薩宝号の念誦、第三に公家関東大檀那御家門のための布薩に次いで、最初にくる項目が羅漢供である。

それ以前は、道元禪師（一二〇〇～五三）が帰朝後宝治三年（一二四九）元旦、永平寺において羅漢供養の大法会を修行して<sup>16</sup>、また、道元より先立つ明庵栄西（一一四一～一二一五）は建久九年（一一九八）成立の『興禅護国論』下巻に禅院の中で行うべき行事を十六項目にわたって書いておいた。

又禅院中一廻行事有<sub>二</sub>十六<sub>一</sub>。一 聖節道場。謂今上皇帝降生日、以前三十日間、毎日不断奉<sub>レ</sub>誦<sub>三</sub>大般若仁王法華最勝等經<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>祈<sub>二</sub>聖寿無疆<sub>一</sub>。二念誦。謂毎月初三、十三、廿三、初八、十八、廿八、六箇日、有<sub>二</sub>儀式<sub>一</sub>、念<sub>二</sub>十仏名<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>祝<sub>二</sub>皇風遠扇帝道久潤仏法永弘利生広大、兼報<sub>二</sub>一草一葉施主恩<sub>一</sub>矣。三土地神事。謂毎月初二、

十六、両日、諸神法施、随<sub>レ</sub>処不<sub>レ</sub>同。四報恩。謂毎月朔日奉<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>今上皇帝<sub>一</sub>、講<sub>二</sub>般若經<sub>一</sub>。十五日、奉<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>先皇<sub>一</sub>、講<sub>二</sub>大涅槃經<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>祈請句<sub>一</sub>。五年中月次行事。謂正月羅漢會。二月舍利會。三月大会。四月仏生會、並結夏。五月六月最勝會。七月八月九月般若會。十月受戒。十一月冬節。十二月仏名大会。皆可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>儀式<sub>一</sub>。

今上皇帝の聖寿無疆を祈る聖節道場を筆頭として、第二に十仏名の念誦、第三に土地神事、第四に今上皇帝、先皇のための般若経や大涅槃経を講ずる報恩、それから第五に正月の羅漢供が年中月次の行事として続く。

臨濟宗の寺院では、かつて蘭溪道隆(一一二三―一二七八)『羅漢講式』が円通寺、建長寺、円覚寺、天龍寺、相国寺等で行われていた<sup>17)</sup>。東福寺の場合、羅漢公式の写本が確認されないものの、「天下太平洋内静謐」を祈願する宗風としては、蘭溪『羅漢講式』よりむしろ「十六大羅漢猶如護国」という道元『羅漢供養式文』に近いと言える。ただ、東福寺で羅漢供が正月でなく毎月一日で行われたのは、国家の安寧を願う国家寺院としての意識、または聖一国師の羅漢供への特別な意識があつただろう。

実際に聖一国師は、嘉禎元年(一二三五)入宋し仏鑑禪師無準師範(一一七七―一二四九)の法を嗣ぐ前、明庵栄西(一一四一―一二一五)の直弟上野世良田長楽寺の栄朝や、鎌倉寿福寺の行勇に師事して禅を修めた。さらに聖一国師は東大寺幹事職に勤めるなどの軌跡が日本臨濟宗の祖と呼ばれる栄西に似るところもあり、栄西からの影響を否認することは出来ない。『吾妻鑑』で窺える鎌倉寿福寺における十六羅漢に関する正治二年(一一〇〇)七月と建保四年(一二二六)四月の記事はまさにその一例であるといえる。

まず、「正治二年七月」条に

六日 庚申 尼御台所於<sub>二</sub>京都<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>囚<sub>二</sub>十六羅漢像<sub>一</sub>、佐々木左衛門尉定綱調<sub>二</sub>進之<sub>一</sub>。今日至来、御拝見之後、令<sub>レ</sub>

奉<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>葉上房之寺<sub>一</sub>給<sub>二</sub>云々

十五日 己巳 於<sub>二</sub>金剛寿福寺<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>図十六羅漢像被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>開眼供養<sub>一</sub>。導師当寺長老葉上房律師榮西也。尼御台所  
 爲<sub>二</sub>御聽聞<sub>一</sub>有<sub>二</sub>參堂<sub>一</sub>云々

また、「建保四年四月」条にも

八日 辛卯 將軍家御<sub>二</sub>參寿福寺<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>備<sub>二</sub>供具於<sub>二</sub>十六羅漢影像<sub>一</sub>云々

と、京都で画かせた新<sub>二</sub>図十六羅漢図<sub>一</sub>を用い、鎌倉寿福寺で榮西により開眼供養及び羅漢供が行われていた様分かる。周知の通り、鎌倉寿福寺は北条政子が正治元年（一一九九）に榮西を招聘し開かれたお寺である。『扶桑五山記』には同寺が順徳帝によつて建保三年（一二二五）に建立されたという記録を遺しており、開基が何らかの理由によつて改められたと考えられる。つまり、寿福寺の創建及び中興の翌年に施された開眼供養と羅漢供であり、上棟後当建物の完備、もしくは伽藍の完備のための幹縁であつた蓋然性が高い。

東福寺においても貞和四年（一三四八）九月に当時住職無徳至孝（東福寺二三世）により勸進東福寺十六羅漢幹縁が行われている。<sup>19</sup>時は東福寺仏殿の完工から一年が経つた時期である。当時仏殿本尊釈迦像の貼金や、眉間の毫光はまだ揃えず、八年後延文元年（一三五六）夏に当時の住職大道一以（東福寺二八世）の衆縁により貼金や玉毫が入れられることができた。<sup>20</sup>ちなみに大道は明兆の師であり、当十六羅漢幹縁にも参加した人物である。つまり、貞和四年東福寺で行われた十六羅漢幹縁は、正治二年と建保四年に鎌倉寿福寺で施された羅漢供養と相通ずる性格を持つていたといえる。

また、聖一國師の逸話中梅檀樹の将来に関する言い伝えがある。聖一國師は自ら南宋から将来した梅檀樹を東福寺に移植した後、のちその幹で五百羅漢像を刻むように遺囑したという話である。これはまさに寛政四年（一七九二）にいたって、聖一國師の念願の通り、即宗門派の熙陽龍育（東福寺二六五世）、龍河玄禎（東福寺二六七世）等によって実現され、その経緯が「慧日山東福禪寺転法輪藏記」に記されている。

「慧日山東福禪寺転法輪藏記」には、まず藏殿の復興への発志が窺える。

国師之曾孫剛中柔禪師、住日向之大慈。嘗選三十僧使適元求大藏、閱三載獲二部而返。永和三年丁巳歸一部於此。造殿以安焉。既而殿廢不復作、架在仏殿之内。者幾二百年云、初剛中創即宗院于此山、十伝而至桂岩芳禪師。嘗忼慨以為伽藍如是其具矣。而藏殿独亡、缺典莫最焉。於是發興造孜孜節儉抽衣盂之資

永和三年（一一七七）日向大慈寺の開山玉山玄提の法嗣剛中玄柔（東福寺五四世）が元から齎した大藏経二部の一部は日向大慈寺に、もう一部は東福寺山内に藏殿を造り安置した。その藏殿が廢され、即宗門派の後孫桂岩龍芳（東福寺二六四世）に至って未だ山内にただ藏殿がないことを慷慨し、転法輪藏記を發志興造したという内容である。その内容の後ろに聖一國師の梅檀樹の話が続く。

一式刑善慧大士之法前安大士、二子侍側。蓋用三聖寺故像云、左右之隅置剛中桂岩二禪師之像奉其祀焉。不忘れ所由也。先是山有梅檀樹。乃国師自海西所移栽者近枯矣。因用其材刻五百応真小像、分安左右。可謂至矣尽矣。於是乎伽藍備矣。典刑全矣

輪藏の前方には三聖寺の故像善慧大師と脇侍二子、左右の隅には剛中玄柔像と桂岩龍芳像が祀られた。また、聖一國師の海西より移栽した梅檀樹は近ごろ枯れ、その材で五百羅漢の小像を刻み左右分けて安置したという造営記録である。まさに聖一國師の将来の梅檀樹に拘る逸話が寛政四年実現したのである。

以上をまとめると、東福寺における羅漢信仰とは、単に羅漢供として、あるいは流行りの五百羅漢信仰としてではなく、開基道家の創建趣旨や、開祖聖一國師との拘わりのある信仰による東福寺ならではの宗風として山内に位置づけられていたことが分かる。

## 二、東福寺開山忌と羅漢供

康暦の政変が起きた康暦元年（一三七九）は、歴史上のみならず、禪宗史においても春屋が丹後の雲門寺から京都に戻り、日本初の僧録として五山派の教団管理機構を確立させることになる転換期であった。聖一派や東福寺においても康暦元年は、聖一國師の百年忌に当たる年で、聖一國師の百年忌齋を起点として聖一派内の結束を固め、伽藍の整備や五山の地位の安定さを図っていく転換期に当る。

康暦元年、性海の「東福開山聖一國師忌齋幹縁疏」には、各地に広がっている聖一派の結束を求めようとする意志が窺える。

伏以、万年正統之法道、本朝最為盛矣。慧日蓋其權輿也。國師、弘安庚辰入定呼常樂一也。子孫相承不<sub>レ</sub>忘、追崇於歲時一、至<sub>二</sub>于今永和己未<sub>一</sub>已得<sub>二</sub>百年<sub>一</sub>矣。實可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>千載之一遇<sub>一</sub>也。然則茲孟冬之忌齋、不<sub>レ</sub>可<sub>下</sub>与<sub>二</sub>常年<sub>一</sub>同上、普<sub>二</sub>告夏夷遠近之法属<sub>一</sub>、各詣<sub>二</sub>卒堵下<sub>一</sub>、自致<sub>二</sub>嚴修<sub>一</sub>、以上酬<sub>二</sub>慈蔭<sub>一</sub>者也<sup>24</sup>



万年山正統院の無準の法道は日本で盛んになり、慧日山東福寺はその始まりである。弘安三年（一二八〇）聖一国師が常楽庵で寂してから今年永和五年（一三七九、三月二十二日康曆に改元）に百年となった。実に千載一遇のことなので、今回の十月の忌齋は例年の通りには出来ず、満天下の法属に知らせ、みな常楽庵に詣で百年忌齋を厳修するの  
が、聖一国師の慈蔭に報いるのであるという内容である。つまり、聖一国師の百年忌を媒介として全国各地の聖一派を呼び寄せている。

それからその翌年康曆二年（一三八〇）聖一派下の十刹甲利五十二ヶ寺を定めたことになる。<sup>26</sup> 聖一国師が寂する四ヶ月前弘安三年六月に、東福寺・承天寺・崇福寺・水上万寿寺の規範八ヶ条と、普門院・常楽庵の条々規式<sup>27</sup>を定めてから百年ぶりのことである。言い換えれば、東福寺下四ヶ寺、すなわち博多、筑前、肥前の九州の地方勢力から、百年の間広がっていた三十五ヶ国の地方勢力の本末関係を再整備したことを意味する。

このような歴史的背景の中で、至徳三年（一三八六）十月十七日、つまり開山忌齋に当時の住持振岩は明兆が書いた五百羅漢図五十幅の慶讃仏事を行い、そこで性海は「東福羅漢供跋」を作った。性海の「東福羅漢供跋」を見ると、まず東福寺の画僧明兆の紹介から始まる。

惠峯兆上人者、日本開国最初淡州人事也。天賦真卒、頗少<sup>二</sup>人情<sup>一</sup>、愛<sup>レ</sup>画入<sup>二</sup>骨髓<sup>一</sup>、丹青得<sup>二</sup>其妙<sup>一</sup>也。曾<sup>二</sup>画<sup>一</sup>五百阿羅漢<sup>一</sup>、鎮<sup>三</sup>之於<sup>二</sup>山門<sup>一</sup>。下筆之日、小使童子、於<sup>二</sup>法性之路傍<sup>一</sup>拾<sup>二</sup>得<sup>一</sup>祭羅漢文<sup>一</sup>、獻<sup>二</sup>之兆<sup>一</sup>也。以為<sup>二</sup>吉兆<sup>一</sup>、深秘在<sup>二</sup>篋中<sup>一</sup>、羅漢功成而慶讃日、出<sup>レ</sup>之示<sup>二</sup>退耕老禪<sup>一</sup>、老禪不<sup>レ</sup>勝<sup>二</sup>隨喜<sup>一</sup>。

次いで七言絶句が続く。

五百遠塵離垢者、一毛端上現神通、上人已熟天台路、不覺兼身在<sup>(28)</sup>此中

ここで注目すべきのは、第三句と第四句である。上人はすでに天台路に精通し、気づかないうちに画中の天台路にいるという内容である。

当羅漢供に参加していた春屋の偈にも

轉身路在<sup>(29)</sup>筆鋒通、定起天台方広鐘、供得清茶花一盞、半千尊者飽<sup>(29)</sup>春風

と、五百羅漢図を拝見し、まるで身を天台路に移ったような様を描写している。さらに、『東福寺誌』に収録されている兆殿司の「羅漢図記」には

図中有<sup>(30)</sup>渺僧請羅漢者是絵<sup>(30)</sup>国師聖一也。渡<sup>(30)</sup>石橋指<sup>(30)</sup>彼方者是絵<sup>(30)</sup>自身也

と、五百羅漢図五十幅中「天台石橋<sup>(31)</sup>図」の場面で、あの遠くで羅漢を請うている僧は聖一国師であり、そつちを指しながら橋を渡っている僧は明兆自身であることを示す。実際、聖一国師は中国滞在中に、嘉応元年（一一六九）に入宋した俊乗房重源（一一二一～一二〇六）とともに石橋を渡った。

明兆筆五百羅漢図は、京都大徳寺や鎌倉円覚寺に所蔵される五百羅漢図と同様に、中国天台宗の発祥の地として知られる天台山方広寺に五百羅漢が示現するという羅漢信仰に由来するものである。殊に画幅のなか天台石橋図は、石梁の下を跳ねる瀑布で知られる実景にもとづいた製作であり、現状感があふれる。開山忌に当たって天台石橋の実景

図の中に聖一國師が示現するという設定は、明兆を聖一派の画僧として刻印させたのはもちろん、長期間経済的にも存立的にも不安定だった東福寺を見守ってきた聖一派構成員には聖一國師への主盟心を呼び起こすのに充分であったにちがいない。

五百羅漢図を慶讃する三年前、永徳三年（一三八三）に自画像として描かれた明兆筆「明兆自画像」（住吉広行模東福寺藏）に、性海が残した賛文により、五百羅漢図の制作に東福寺の長老性海が拘っている様子が分かる。

有時拈<sup>二</sup>起一毛頭<sup>一</sup>、現<sup>二</sup>出五百大比丘<sup>一</sup>、緬思、昔時老禪月。与<sup>二</sup>此吉山<sup>一</sup>一風流、移<sup>二</sup>第一会天台<sup>一</sup>、見者聞者  
可<sup>二</sup>以嗟嘆<sup>一</sup>。退耕隱者性海叟、摩<sup>二</sup>掌老眼<sup>一</sup>、子細看也。奇特不思議、天上人間、希有瑞。（中略）吉山兆上人図<sup>二</sup>  
東福五百羅漢<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>回<sup>レ</sup>郷、自写<sup>二</sup>吾形<sup>一</sup>奉<sup>レ</sup>呈<sup>二</sup>北堂<sup>一</sup>、仍詰<sup>二</sup>其証<sup>一</sup>」

明兆を羅漢図で名高かった禪月大師貫休と対応させ、明兆の画いた天台路の五百羅漢の有様もまるで現前に見ているようであると褒め称えている。そして、最後の文章によって「明兆自画像」は東福の五百羅漢図が制作途中、郷に帰れない明兆が母に送るために描いたものということが分かる。つまり、明兆は少なくとも三年以上五百羅漢図の制作に携わっており、それを性海も知っていたのはもちろんのこと、のち開山忌に羅漢供を計画する程管轄していたことである。

康暦二年（一三八〇）に東福十刹甲刹五十二ヶ寺という一種の本末関係を再編し、聖一派内の結束力と組織力を高めた東福寺が、次に解決しなければならない当面問題は、伽藍の復興や、さらに夢窓派の中心の室町幕府の五山派教団機構において政治的力量を育てることにあったの言うまでもない。

当時東福寺は元応元年（一三一九）二月七日第一回目の火災以降、法堂はまだ再建されなままだった。南都六宗

と平安二宗に禅宗を加えた九宗兼学の道場を目指した創建当初とは異なり、禅宗が興隆を極めた室町時代の五山巨刹の東福寺において、法堂の持つ意味合いも変わってきたにちがいない。そもそも法堂は、禅宗寺院において住職が須弥壇上に昇って上堂説法を行う、最も大切な建物である。したがって、当時東福寺において法堂の再建が急務であったと推測するのは難しくない。実際、振岩が住山していた至徳三年四月には九州から法堂幹縁瑋公都寺が帰洛しており、同年十月の羅漢供形式で行われた開山忌もその延長線上にあったと見られる。

僧録春屋によって新たに五山位次が大改制された至徳三年七月十日、東福寺は五山第四位に昇り、その翌年東福長老性海は「五山之上」に陞位した南禅寺に龍湫周沢（南禅寺三二世）、太清宗渭（南禅寺四三世）に次いで住山し三住した。<sup>(34)</sup>つまり、鎌倉幕府滅後、夢窓派の牽制により国家寺院としての位置が不安定だった東福寺が、五山としての確固たる地位や政治的力量を備えるようになったことを意味する。

要するに、至徳三年の羅漢供は、法堂再建のための幹縁が始まり、東福寺が五山第四位に陞位した同年に、聖一國師が五百羅漢の一員として現前に示現するというイベント的な開山忌であって、東福寺復興運動の一環でもあったと言える。その開山忌に用いられた明兆筆五百羅漢図は、まさに聖一國師への主盟心と呼び起こし聖一派内の結束を高めるのに公用画であり、また、「新大仏」とともに名高かった名声は、この絵が本来の役割を全うしたことを裏付けている。

## 結論

以上、明兆筆五百羅漢図は、性海が中心になって聖一派の結束を図り東福寺の復興運動に拍車をかけていく時期に画かれ、五山としての確固たる地位が保障された至徳三年に慶讃が行われている。言い換えれば、東福寺としては伽

藍の再建が何よりも急がれる時に、性海の支援下で大作五百羅漢図は制作されたのである。

本稿では、まず東福寺における五百羅漢信仰が開基道家と開山聖一國師に由来していることを指摘し、至徳三年の羅漢供は、東福寺の復興運動という時代的情況の下で、開山忌に併せ聖一國師を五百羅漢の一員として現前に示現させるという企画の下で行われたと推論した。つまり、聖一國師への主盟心をもとに派内部の結束を高め、東福寺の復興運動を促進させるためであったにちがいない。

ちなみに本稿は、二〇一五年度修士論文「東福寺と吉山明兆」を拡充して論文としたものであり、康暦の政変という歴史上の転換点から性海と明兆に焦点を当て、五百羅漢図の史的意義を探った。康暦の政変が歴史上及び禪宗史上において重要な転換点になったのは、將軍義満と初代僧録春屋という二人の役割によるところが大きかったからであろう。東福寺においても康暦の政変が重要な転換点であって、その時、聖一派内部には義満と春屋との信任が厚かった長老性海と、画僧明兆が存在していた。だからこそ、のち東福寺の復興運動は実を結ぶことになり、明兆系の仏画は禪宗寺院仏画の規範となったといえる。

## 注

- (1) 明兆筆「五百羅漢図」五十幅(重文 絹本着色) は現在四十七幅が遺っており、四十五幅は京都東福寺に、二幅は東京根津美術館に蔵されている。
- (2) 「東福羅漢供跋」(東福寺靈源院蔵)、『性海靈見遺稿』(上村観光『五山文学全集』第二卷、思文閣、一九三七年、一二四三頁)に収録されている。
- (3) 春屋妙葩「供五百羅漢」『再板普明國師語録』下、天保八年(一八三七)。
- (4) 類似した一例として、建長寺の例が知られている。当時建長寺住職だった中岩円月(住山一三六七年十月三日〜一三六七年春、建長四一世)の「画五百羅漢疏并序」(『東海一瀛集』)には「山中頼有<sub>二</sub>別宗令公<sub>一</sub>。(中略)膠青所<sub>レ</sub>糜非<sub>二</sub>一力之能<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是栢庵意公、及諸勤田同<sub>レ</sub>心協<sub>レ</sub>力賛助」と、画工別宗□令と助力者建長天源庵主栢庵宗意が紹介されている。当時の建長寺は跋文の通り、伽藍

と各殿閣の荘嚴が終わっていて、『日工集』貞治六年二月二十七日条)、ただ五百羅漢図が揃っていないのみであった。それとは逆に東福寺の場合は、伽藍の再建が急がれる時期に五百羅漢図という大作を東福長老性海の助力下で作っており、単に五百羅漢図を具備するという理由だけでは説明できない。

(5) 竹貫元勝「春屋妙葩と定山祖禪」(『新日本禪宗史』禪文化研究所、一九九九年、一〇二～三頁)。

(6) 「大日本国禪院諸山座位条々」『扶桑五山記』、または『円覚寺文書』二九四号。至徳三年七月十日に南禅寺を「五山之上」として禪林の最高位とする代わりに相国寺を「五山」に入れ、さらに五山を京都五山と鎌倉五山と分割する五山制度の大改革を断行した。その以後京都五山と鎌倉五山との位次は殆ど変わることなく維持される。

(7) 至徳三年以前の東福寺は最初建武元年(一三三四)後醍醐天皇により五山第三位に列されて以来、直ちに翌年から第五位に落とされるなど、五山から除かれる不安に怯えていた様子が「建武二年乙亥五月」『海蔵和尚紀年録』と「秀峰説」『早霖集』などから窺える。

(8) まず正中二年(一三二五)二月十日仏殿が上棟さ

れる(『武家年代記』)が、再び建武元年(一三三四)正月四日仏殿が火かれ(『海蔵紀年録』)、さらに建武三年八月二十四日には仮仏殿まで全焼してしまった。それから貞和三年(一三四七)六月二日仏殿が上棟され(『梁銘』『東福寺誌』大本山東福禅寺、一九三〇年、三五〇～一頁)、やがて正長元年(一四二八)四月五日にいたって法堂が上棟されることになった(『梁銘』『東福寺誌』、五六六頁)。

(9) 東福寺の住持職は十方住持制をとらず、当初から聖一国師により聖一門徒のみが独占する度弟院と定められた(『東福寺文書』一二五号)。後醍醐天皇による五山官寺の制定当初から東福寺が五山寺院として存立的な危機に瀕していたのは、東福寺が度弟院制度という官寺としての欠格事由を持っていたためといえる。ちなみに相国寺の場合は春屋の寂後、応永八年(一四〇一)絶海中津(相国寺六世)の三住に際し、義満により夢窓派の度弟院となる。

(10) 聖一国師の示寂については、鉄牛円心編『聖一国師年譜』に「弘安三年十月十七日、東福老珍重、授筆。而化」とある。性海霊見による「東福開山聖一国師忌斎幹縁疏」は現在東福寺退耕庵に蔵

- (11) 「嘉禎二年丙申」前掲『聖一國師年譜』。  
 (12) 『東福紀年録』の「建長七年乙卯六月二日」条に「藤丞相実経慶東福寺」。本朝昔既有「舍那弥陀弥勒三大像」、而今復安「釈迦大像」。是故俗指東福寺謂「新大仏」とある。  
 (13) 『東福寺文書』九号。  
 (14) 鄭美景「中世の禪宗寺院藏文殊図の研究―東福寺の文殊信仰に関する試論―」(花園大学大学院仏教学研究)三、花園大学大学院仏教研究会、二〇一八年、一九〜二〇頁。  
 (15) 応安三年(一二八〇)九月十五日成「公家関東大檀那御祈祷等注進文」(前掲『東福寺誌』、一三九〜四一頁)  
 (16) 『十六羅漢現瑞記』(大久保道舟編『道元禪師全集』下巻、筑摩書房、一九七〇年)、または、道元桐野好寛「道元禪師撰『羅漢供養公式文』における舍利供養」(『印度学仏教学研究』四八(1)、一九九九年)。  
 (17) ミヒヤエラ・ムロス「蘭溪道隆『羅漢講式』について―その成立と伝播を中心に―」(『印度学仏教学研究』六〇(2)、二〇一二年、六八二〜三頁)。  
 (18) 「相陽亀谷山金剛寿福禪寺」『扶桑五山記』(小林承鐵編『合本 支桑禪刹一 支桑禪刹・倭漢禪刹・扶桑五山記』春秋社、二〇一四年、三八九頁)。  
 (19) 貞和四年の「勸進東福寺十六羅漢幹縁」(『東福寺誌』大本山東福禪寺、一九三〇年、三五八〜九頁)。  
 現京都建仁寺藏の良全筆「十六羅漢図」は各幅に「東福寺常住」と款記があり、当時羅漢供のための東福寺僧衆の勸進により制作された羅漢図であったと推測される。  
 (20) 「前住南禪大道以禪師伝」『大道和尚語録』下。  
 (21) 「慧日山東福禪寺転法輪藏記」(前掲『東福寺誌』、一〇五八頁)。  
 (22) 無着道忠真筆写本「万里砂」(前掲『東福寺誌』、七八八頁)には「文禄五年(一五九六)七月十二日夜、大地震、堂舎破敗云々」になっており、この時期に藏殿が倒壊したと考えられる。  
 (23) 「慧日山東福禪寺転法輪藏記」(前掲『東福寺誌』、一〇五九頁)。  
 (24) 前掲「東福開山聖一國師忌斎幹縁疏」。  
 (25) 前掲『東福寺誌』、四六六〜八頁。そのほかに、康暦二年正月二十六日には普門寺が十刹に昇り(『東福寺文書』第六八号)、同年八月には東福寺



や常楽庵に入りやすく「通天橋」を建てた（前掲『東福寺誌』、四六二〜五頁）。これらの一連の事業は当時の僧録春屋の主導によるものであった（『康暦元年己未』『普明国師行業実録』）。春屋と聖一派との関連性や、東福寺の時代的背景については、今後「東福寺における転換期」というタイトルで掲載準備中であるので本稿では割愛する。

(26) 『東福寺文書』一二二号。

(27) 『東福寺文書』一八号。

(28) 前掲「東福羅漢供跋」。

(29) 「供五百羅漢」兆公殿司画成時有「此偈」、『再板普明国師語録』下。

(30) 兆殿司の「羅漢図記」（前掲『東福寺誌』、四八八頁）。

(31) 明兆筆「五百羅漢図」五十幅中「天台石橋図」は、『日本美術全集』第二二卷（講談社、一九九二年、一二八頁）の単色図版六九と、『国宝・重要文化財大全』一絵画（上巻）（毎日新聞社、三四七頁）の図版五九四で確認できる。ちなみに、大徳寺伝来の「五百羅漢図」百幅中「天台石橋図」は、現

在米国・フリーア美術館にあり、『大徳寺伝来五百羅漢図』（思文閣出版、二〇一四年、一〇三頁）の図F2や、奈良国立博物館編『特別展 聖地靈波』（大伸社、二〇〇九年、二三五頁）の参考図版二で窺うことができる。

(32) 原永徳三年（一三八三）制作の明兆筆「明兆自画像」（住吉広行模・性海霊見賛・東福寺蔵）。その賛文は「吉山肖像之賛」と前掲『五山文学全集』第二卷（一二四八〜一二四九頁）に収録されている。但し、『五山文学全集』第二卷では「第二会」となっているが、「明兆自画像」では「第一会」になっている。

(33) 「至徳三年丙寅四月」『振岩琴之玉和高語録』には「謝法堂幹縁瑠都寺、自九州一至」という記録がある（前掲『東福寺誌』、四八一頁）。

(34) 康暦元年四月、春屋が京都に戻って京都五山を中心とする五山派の教団管理機構を再整備する時期に当たり、性海は南禅寺、天龍寺、建仁寺の京都五山の住持職に歴任された極少数の春屋に信任される人物であった。